

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

新知故温

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2020.12 Vol.37

令和2年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
<https://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

日本装飾大鑑 ————— ①

■図書館散歩

目的のない旅に出たい ————— ②

芸術文化学科 准教授
高島 知佐子

■図書館散歩

図書館へ行こう! ————— ③

デザイン学科 教授
花澤 信太郎

■特集

わたしの1冊 ————— ④

～おすすめの本を紹介します～

■巻末

図書館ニュース ————— ⑧



日本装飾大鑑 河邊正夫[編輯]

1：自推古天皇時代至天平時代 2：自天平時代至弘仁時代 3：自藤原時代至平氏時代
4：自鎌倉時代至足利時代 5：自豊臣時代至徳川時代 和装折本、帙入

芸艸堂, 1915.5

貴重書庫 [757/Ka 91]

今回は、大正初期に刊行されたデザインの図書をご紹介します。『日本装飾大鑑』は、推古天皇の時代から江戸時代に至るまでの間の日本の装飾模様をまとめた、貴重なデザインの資料です。形態は、横に長くつなぎ合わせた紙を端から折り畳んで作った蛇腹状で、和本の装丁の折本です。時代ごとに5冊に分けられ、帙と呼ばれるケースで1セットにまとめられています。

本書は、推古天皇時代から天平時代まで、天平時代から弘仁時代まで、藤原時代から平氏時代まで、鎌倉時代から足利時代まで、豊臣時代から徳川時代までの5つの時代に分けて、日本の装飾文様を通観しています。装飾文様は、外来文化や権力者の権威、時代の空気などを反映しつつ、多様な発展を遂げてきたことが分かります。

収録された約600点にのぼる装飾文様には、すべて彩色が施されていて、それぞれのデザインを引き立たせています。各図には名称が附されていますが、解説などはなく、装飾模様がメインの構成となっています。

本書を著した河邊正夫は、1874年に岡山県上道郡宇野村（現在の岡山市）で生まれました。東京美術学校図案科を卒業後、1900年に同校の助教授に就任します。その後、国民美術協会理事に就き、画家として活躍したほか、帝国劇場喫茶室や東京中央停車場（東京駅）ステーションホテルのロビーなど、わが国の代表的な建築物の室内装飾を手がけ、高い評価を得ました。その傍ら、彼は1897年から本書の編纂に取り掛かります。全国から集めた素材を選択し、独自の手法で纏め上げた本書は、日本の装飾模様の集大成と言えるでしょう。

参考文献：河邊正夫[編]、城一夫[解説]『日本の古典装飾：天平から江戸の時代様式にみる』[757/Ka 91]



芸術文化学科 准教授

高島 知佐子

Takashima Chisako

本文中に登場した図書

植村直己[著]
『青春を山に賭けて』
290.91/U 42西堀栄三郎[著]
『南極越冬記』
081/I 95/318沢木耕太郎[著]
『黄金宮殿』
(深夜特急,第1便)
915.6/Sa 94/1沢木耕太郎[著]
『ベルシャの風』
(深夜特急,第2便)
915.6/Sa 94/2沢木耕太郎[著]
『飛光よ、飛光よ』
(深夜特急,第3便)
915.6/Sa 94/3林望[著]
『イギリスはおいしい』
302.33/H 48妹尾河童[著]
『河童が覗いたインド』
292.5/Se 72森本達雄[著]
『ヒンドゥー教:インドの聖と俗』
081/C 64/1707ピエトラ・リポリ[著];
雨宮寛、今井章子[訳]
『あなたのTシャツはどこから来たのか?』
誰も書かなかったグローバル化の真実』
586.092/R 49辺見庸[著]
『もの食う人びと』
290.9/H 52ゲーテ[著];相良守肇[訳]
『イタリア紀行』
(上・中・下)
081/I 95/R405永井荷風[著]
『あめりか物語』
913.6/N 14永井荷風[著]
『ふらんす物語』
913.6/N 14ハインリッヒ・シュリーマン[著];
石井和子[訳]
『シュリーマン旅行記清国・日本』
081/Ko 191/1325ワルデマル・アベグ写真・回想録;
ボリス・マルタン文・岡崎秀訳
『一〇〇年前の世界一周:
ある青年が撮った日本と世界』
290.87/A 13

目的のない旅に出たい

コロナ禍で世の中がすっかり変わり半年以上が経つ。10代、20代の時間の多くを旅に費やした私にとって、移動が制限されることは慣れるどころか日に日に辛く感じる。

幼い頃、『南極物語』という映画が大ヒットし、その翌年に冒険家・植村直己がマッキンリーで消息不明になった。この記憶がきっかけで読んだのが植村直己『青春を山に賭けて』、西堀栄三郎『南極越冬記』である。希望と苦難の繰り返しの中で生じる著者の感情の起伏が単々と書かれており、綺麗ごとだけではない人間らしさが溢れ、胸が熱くなる。

残念ながら、私自身に大きな冒険心は生まれなかったが、沢木耕太郎『深夜特急』（第1-3便）には大いに感化された。第一便は、わずかな資金でインドからイギリスまでをバスで旅するという内容である。影響を受けた私は、手始めに安全そうな(?)ヨーロッパにバックパックの旅に出た。往復の航空券だけの気ままな旅で、鉄道や長距離バスでガイドブックにも載っていないような街を回った。この頃読んだ林望『イギリスはおいしい』は、「まずい」と言われるイギリスの食からイギリス文化を見つめたエッセイで、旅先での食を歴史を深める楽しさに変えてくれる。

その後、周遊航空券で約一ヶ月旅をした時に、初めてインドを訪れた。妹尾河童『河童が覗いたインド』を読み、いつか行ってみたいと思っていた。手書きのような字体と絵の解説が、現地で実物を観たい、体験したいという思いを募らせる。最初のインドは驚きとトラブルの連続で、心身ともにヘトヘトになった。しかし、なぜかその後何度も訪れ、行けば行くほどインドは捉え所がなく興味がわいた。インドを理解しようと読んだ本の一つに森本達雄『ヒンドゥー教 インドの聖と俗』がある。著者の体験からわかりやすくインドの宗教や歴史が書かれている。知るほどに謎が深まるインドにまた行ける日はいつだろうか…。

旅に出ると、日々の暮らしでは見過ごしがちな貧困や環境などの社会問題を目の当たりにすることもある。ピエトラ・リポリ『あなたのTシャツはどこから来たのか? 誰も書かなかったグローバル化の真実』は、一枚6ドルのTシャツが著者の手に渡るまでを追いかけた旅を綴っている。アメリカから中国、インドに渡り、児童労働の実態を知る。安価なTシャツの背景にある産業、経済、政治の問題を明らかにしている。ルポルタージュという形で社会問題を取り上げた辺見庸『もの食う人びと』も挙げておきたい。飢餓や汚染に苦しむ人々を描いたもので、身近な食から社会問題を捉えた一冊である。ありきたりだが、知らない世界に目を向けることで自分の価値観が変わり、それが社会を変えるきっかけにつながることに気づく。

これまでの旅を振り返ると、順調な旅ほど記憶がない。予想外の出来事や自分の価値観を揺さぶられるような経験をした旅ばかりが思い出され、衝撃や出会いが旅の醍醐味なのだろうと思う。これはいつの時代も変わらないようだ。

18世紀後半に書かれたゲーテ『イタリア紀行』（上・中・下）には、ゲーテが退屈なドイツでの日々から逃げ出し向かったイタリアでの刺激的な日々が記録されている。当時の宗教、芸術、科学、風俗が知れるだけではなく、気持ちが高揚しているゲーテが感じられるのも面白い。日本人が海外に行けるようになった明治時代に書かれた永井荷風『あめりか物語』『ふらんす物語』は、男女の話を中心に、西洋と日本の価値観の違いに驚きながらもアメリカ、フランスでの日々を謳歌する荷風の享樂的な生活が記されている。現代とは比較にならないほど習慣が異なるであろう海外で、臆することなく楽しむ様子を、読んでいるこちらが驚かされる。

明治時代に外国人が見た日本について書かれたハインリッヒ・シュリーマン『シュリーマン旅行記 清国・日本』、ボリス・マルタン『一〇〇年前の世界一周 ある青年が撮った日本と世界』には、本当だろうか…と首を傾げたくなる箇所もあるが、髪型や服装、歩き方から調理や入浴など、匂いまで感じられそうなほど当時の日本の人々の生活が詳述されている。現代では非常識やタブーとされることが、当時はそうではないことも多く、私たちはたった100年程で作られた価値観の中で生きているということを知る。

旅は道中で起こる出来事を楽しみ、必ずしも目的があるわけではなく計画通りでもない。仕事や学業では目的志向になるからこそ、それ以外では目的のない時間や経験が必要だと思う。好奇心や衝動だけで何かに踏み出すと痛い目にも遭うが、予期せぬ出会いや発見も多い。目的を持ち、将来に備えることを要求される時代だからこそ、時には目的を持たずに動き、思いがけない経験を通して、自分自身や社会の価値観から自らを解放したい。



デザイン学科 教授
花澤 信太郎
Hanazawa Shintaro

本文中に登場した資料

夏目漱石[著]
『吾輩は猫である』
(漱石全集)
918.68/N 58/1

司馬遷[著]
『史記列伝』
081/1 95/B214-5

カエサル[著]
『ガリア戦記』
230.3/C 11

奈良六大寺大観刊行会[編]
『奈良六大寺大観』
702.17/N 51

G・ブラウン、F・ホーヘンベルフ[編]
『16世紀世界都市図集成』
290.173/B 71

児玉幸多[監修]
『五街道分間延絵図』
291.038/G 59

ロラン・バルト[著]、宗左近[訳]
『表徴の帝国』
135.5/B 25

ケヴィン・W・ケリー[企画・編集]、
田草川弘弘[訳]
『地球/母なる星：
宇宙飛行士が見た
地球の荘厳と宇宙の神秘』
448/Ke 32

高畑勲[脚本・監督]
『柳川掘割物語』
219.1/Mi 88

鈴木博之 ほか[著]
『奇想遺産：世界のふしぎ建築物』
520.2/Ki 59/1

鈴木博之 ほか[著]
『世界のとっても建築物』
(奇想遺産：2)
520.2/Ki 59/2

図書館へ行こう！

建築・環境領域に所属している事もあり、これまで沢山の公立図書館や大学付属図書館を見て来ましたが、その結果感じているのは本学の図書館はとて素晴らしい図書館だという事です。

まずあげられるのは、その空間の良さです。皆さんもお気づきかもしれませんが、単に図書館といってもその内部空間は千差万別です。一般的にモダンなテイストであればクールな感じになりますし、木材を多く使えば暖かみのある感じになります。いわば「空間の体温」ともいえる要素になるのですが、色々な図書館を見ていると、どちらもある程度以上になってしまうと本を探したり読んだりする時に、落ち着いて本に集中する事が難しくなるように感じられるのではないのでしょうか。その点、本学の図書館は特に2階の閲覧室など光の感じや内装の素材など丁度いい頃合いであり、本が新鮮に見える空間になっていると思います。

空間が図書館の体であるとすれば、その中を流れる血はやはり図書館のサービスだといえるのではないのでしょうか。実際に図書館のレファレンスサービスに相談すると、いつもの確かな資料を紹介してもらえますし、今年の前期に利用者が少なかった時期にも定期的にメンテナンスされた新着図書コーナーには、常に時代の意識を反映した書籍が展示されていました。これらの条件がそろった本学の図書館がとてもよく利用されている事は、貸出冊数が全国の大学図書館の平均の2倍を上回っているという点にも現れていると思います。

『吾輩は猫である』はその図書館で出会った本の中で最も印象に残っているものです。実は、初めて『吾輩は猫である』を読んだのがいつの事か覚えていないのですが、本学の図書館で手に取ったこの本を読みはじめた時に、以前に読んだ『吾輩は猫である』とは全く違った印象である事に気付きました。その印象の違いが、旧仮名づかいによるものなのか、本のレイアウトや装丁によるものなのか、読み手の年齢によるものなのか、はたまたそれらの総合によるものなのか、その理由を上手く説明する事は難しいのですが、感想を一言で言えば、「こんなに面白い物語だったのか！」という物でした。そして終末の予感を漂わせながら、ハイビートで進行する文章を読むうちに、頭の中でシンド・ヴィシヤスの歌うマイ・ウェイが聞こえて来るような錯覚を覚えたのでした。

後の資料は概ねそれらが作成された年代順にならべてあります。紀元前1世紀に成立した司馬遷の『史記列伝』には様々な人物像が記されていますが、その中で印象に残っているのが「滑稽列伝」です。ここに描かれた人達を見ていると、どんな時でも冷静さとユーモアが大切な事が伝わってきます。同じく紀元前1世紀の『ガリア戦記』はカエサルによる実際の戦争の記録ですが、あまりに見事な戦いへの臨み方と、それを記録する達意の文章がとても印象的です。この本を読んでいると、ヨーロッパという地域にどのような民族的な源流があって、その地でローマ帝国がどのような様に版図を広げ、崩壊していったかの理由の一端が見えてくるような気がします。次の『奈良六大寺大観』は、日本の古代に創建された寺院と仏像の写真集です。ここに収められている建築の大半は今から千年以上前のものですが、大陸からの文化を吸収して創建されたこれらの寺院と文物のおおらかな様子がよくわかります。

『16世紀世界都市図集成』に収められているのは、当時のヨーロッパの都市の鳥瞰図です。この史料の記録を見ていると、この時代には「都市」というある意味での人類最大のデザインが、言語という境界を超えた共通の認識の下に多様な展開をなしていたという事がわかります。日本の伝統的な空間の記録としてご紹介したいのは『五街道分間延絵図』です。ここには、東海道を含む五街道や脇街道の様子が記録されていますが、これらは単なる絵図ではなく現地の様子を詳細に調査した結果が表現されています。以前に知立の旧東海道を調査した際に、町外れにあった幅も長さも4m程の小さな橋の微妙な線型の変化が、絵図に描かれているのと寸分違わぬ方向であったのに驚いた事がありました。今見ればなんの変哲もないその道を一人眺めながら、大勢の庶民や大名行列が通っていた風景を想像すると、とても不思議な気持ちになります。

『表徴の帝国』は1970年代のロラン・バルトの著作です。皆さんはこのタイトルを読んで何を連想されますでしょうか。実は『表徴の帝国』とは日本の事なのです。フランス人のバルトから見た日本の記述は、ふだん我々の気付かない特徴を教えてください。1988年に刊行された『地球/母なる星』は宇宙飛行士が見た地球の写真集です。ここに収められた写真と文書からは宇宙から見た地球の美しさが伝わってきます。

スタジオジブリの製作した『柳川掘割物語』には、柳川の掘割の素晴らしさと、その掘割がいかに保存されたかが記録されています。約170分に及ぶドキュメンタリーですが、日本の伝統的な町に興味のある人にはぜひ見て頂きたい映画です。

最後に紹介する『奇想遺産』には、世界の様々な不思議な建築が紹介されています。そもそも建築の設計者には「不思議」な人が多いのですが、それらの人達が「真面目に」考えると建築はどうなるのか？ぜひ皆さん図書館に足を運んでご覧下さい！

『これからの男の子たちへ：
「男らしさ」から
自由になるためのレッスン』

太田啓子〔著〕
大月書店，2020.8
[367.5/0 81]



私がご紹介したいのは『これからの男の子たちへ：「男らしさ」から自由になるレッスン』です。つい2、3カ月前出会ったばかりの本なのですが、とても読みやすく、身近な話題を「性別」という観点から考え直すことができる良い本だと思ったので、「私の一冊」として紹介することにしました。

私は小さなころから作者の太田さんと同じく「女らしさ」「男らしさ」の押し付けには反発、というか違和感を覚えていた記憶があります。「普通」という言葉も好きではなくて、当たり前とされることに疑問を持つことが多かったです。そういう自分の性格からか、「女性の生きづらさ」をいろんな場面で目の当たりにすることに大きな違和感を覚えました。そしてその現状を変えていくために、女性についてもっと男性やその他の性別を生きる人々に知ってほしいと思うようになりました。しかし、女性の権利について学んでいると、逆に自分が「男性」について知らなすぎることに気づきました。そんな気づきをきっかけに読もうと思ったのがこの本です。

この本では、私と同じく幼少期から「女らしさ」「男らしさ」の押し付けに反発を覚えながら育った作者の太田啓子さんが二児の男の子を育てている実体験をもとに「有害な男らしさ」（アメリカの心理学者が提唱した言葉）について、子育ての中のよくある場面をあげて問題提起をしてくださっています。また、太田さんが男性を含む様々な方と「有害な男らしさ」をテーマに対談をした、様々な視点から見た男性についての話題も書かれています。

「有害な男らしさ」と聞くと、男性批判か？と思われるかもしれませんが、本書で書かれている多くの話題は「男性の生きづらさ」についてです。男性性にとらわれ、男性が自分自身を大切にできなくさせているかもしれない「有害な男らしさ」について、男性が気づいていないかもしれない「男性特権」について、身近な話題をテーマに解説されています。性別関係なくぜひ一度読んでみてほしい一冊です。

【文化政策学部 文化政策学科 2年 伊藤 真優】

本学に入学してから、美術作品を見る機会が増えました。実際の作品を見に行くのはもちろん、図版や展覧会図録を利用して作品を確認することもあります。より一層自分の感性を磨くためにも、綺麗な作品からよくわからない作品までもっと多くの作品を見に行きたいです。

しかし、私の希望を叶えることが難しくなったある事件が起こりました。新型コロナウイルスの世界的流行です。昨今の美術館は、国内外問わず多くの美術作品を貸し借りしています。そのおかげで、私たちは近隣の美術館でモネ、ゴッホ、ピカソ、葛飾北斎、黒田清輝…など有名な画家の作品を見ることができるのです。そのため、ウイルスの影響が美術作品の展示に及ぼした影響は想像に難くありません。当然ながら感染拡大防止のために人々の往来を制限した結果、美術作品の貸し借りが難しくなりました。

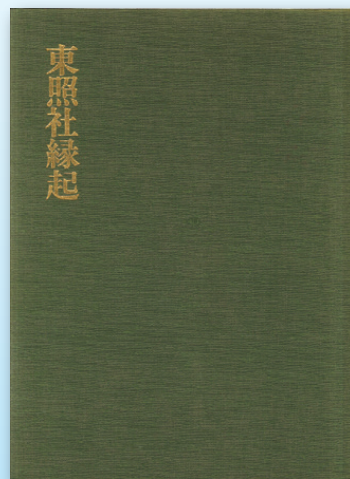
そこで、今回は私の研究テーマに関連した、遠くへ移動せずとも美術作品に触れることができる本を紹介させていただきます。世界遺産・日光東照宮の宝物館に所蔵されている「東照社縁起」は徳川家康の一生と日光東照宮の成立を主題として制作された絵巻作品です。私はこの作品に描かれた徳川家康について卒業論文で取り扱っています。過去に作品の模本を見たことはありますが、実際の作品は見たことがありません。

実は、本物の美術作品を見るためには公開時期が重要になります。運良く作品が展示されているタイミングに博物館・美術館に行くことができれば、私たちと作品の対面が叶うのです。しかし、作品の保存状況や時世などの条件によってはなかなかお目にかかれない作品もあります。そのため、図版で作品を見ることが作品に触れる近道なのではと思います。この紹介で「東照社縁起」をはじめ、美術作品に興味を持った方はぜひ図書館の図版を開いてみてください。そして、いつか本物の作品を見たいと思っていただけるのならば嬉しいです。

【文化政策学部 芸術文化学科 4年 高橋 未来】

『東照社縁起』
(続々日本絵巻大成；
伝記・縁起篇 8)

小松茂美、神崎充晴〔執筆〕
中央公論社，1994
[721.2/Ko 61/8]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

本を読むのは役に立つ、とあんまり言われすぎると、読書のたのしみを傷つけられるようで、なんだかしらけた気もちになる人がきつーと思います。すくなくとも、大学生になるかならないかというころの私はそうでした。だれにとっても役に立つ本などあるわけがないし、そもそも本の世界は現実の役に立つために存在しているわけでもない。そんな風に感じてしらがちだった時期にはじめて手にとり、妙に力づけられたのが、寺山修司の『戦後詩』（原著1965年）でした。

寺山はそこで、日本のいわゆる「戦後詩」（第二次世界大戦以後の詩）の多くを、役に立たないものとして批判しています。いわく、それは個人の声を画一化する代理人のこぼれであり、人生を語っていない。それは過去の幻滅をひきずった弱者の思想であり、行動の力となっていない。それは相互に慰めあう共同体にとどまっておき、ほとんど他人に語りかけていない……。当時29歳の寺山の、ときに性急な筆致には容赦がありません。

とはいえ彼は、詩の世界をすてて現実にむかうべきだと言っているわけではありません。むしろ寺山が詩人たちにもとめるのは、詩の世界のなかをほんとうに冒険することです。そうすることによってはじめて、現実を変革するための力が、他人に語りかけるための声が、詩のうちに籠められるからでしょう。そして彼は、「役に立つ詩」はなくても「詩を役立てる心」はある」（161頁）と言います。詩・本のかたちでのこされた詩人たちの冒険の意味を、あらためて役立てられるかどうかは読者にかかっているのでしょう。

ある種の戦後詩には、ほんとうにそのような力が籠められているのでしょうか。批判をくりかえしながら寺山はそう信じているのが、伝わってきます。記号論・主題論・詩壇論などを展開し、アンソロジーとして読める配慮までしながら、彼はここで戦後詩の世界を多面的にしめそうとしているようです。この本が役に立つかどうかはわかりません。役立てる人がきつーと思います。

【文化政策学部 国際文化学科 講師 中田 健太郎】

『戦後詩：ユリシーズの不在』 （講談社文芸文庫）

寺山修司〔著〕

講談社，2013.8

[911.5/Te 67]



『もし「右」や「左」がなかったら： 言語人類学への招待』

井上京子〔著〕

大修館書店，1998

[801.03/1 57]



みなさんは、「右」や「左」という概念を持たない言語が、世界に多数存在することをご存じでしょうか。『もし「右」や「左」がなかったら—言語人類学への招待』、世界の少数言語を紹介する本書は、私たちの「当たり前」が覆るような発見に満ちた一冊です。

私がこの本を手にしたのは大学生の頃、研究していたバプアニューギニアのフィールドワークから帰ってきた直後の事でした。実は、私が研究する民族の言葉にも「右」と「左」が存在しないのです。「言語が異なる」とは、「考え方が異なること」であることに気付かされた瞬間でした。

左右がない言語があるということに、大発見をした気持ちだった私でしたが、本書に出会ってさらなる驚きに遭遇しました。著者の井上京子さんによれば、左右を持たない言語は結構あって、中央アメリカ、オーストラリア、インド、アフリカなど世界の各地に存在しているそうなのです。つまり、私たちが学んできた日本語やヨーロッパ諸語に「たまたま」左右の概念があっただけで、それは世界の「当たり前」ではなかったということです。

では、「右」や「左」を持たない言語では、どうやって左右を表しているのでしょうか。本書では、左右の代わりに「上下」や「東西南北」などを使う言語が紹介されます。何より興味深いのは、左右という概念がなくとも、まったく問題なく社会が成り立っているということです。言語人類学は、言葉を通じて社会の多様性を示してくれます。

左右以外にも、本書には、決して日本語では「翻訳」できない言葉の数々が紹介されています。最後にひとつ。日本語では「ここでは『胸』にある」と考えますが、これも世界の「当たり前」ではないようです。南太平洋で話されるキリヴィア語では、「ここでは『のど』にある」と表現するそうです。なぜだと思いますか。ぜひ本書を開いて答えを探しに行きましょう。

【文化政策学部 国際文化学科 講師 武田 淳】

『本好きの下剋上：
司書になるためには
手段を選んでいられません』
(シリーズ、第1部～第5部)

香月美夜〔著〕

TO ブックス, 2015.2-

[913.6/Ka 99]

※書影はシリーズ第1部『兵士の娘』(1)



皆さんは、「本」に対してどのような思いを持っているでしょうか。私にとっての「本」は、子供の時の絵本であり、青少年時代の学校の教科書であり、研究するための専門書などと、知らず知らずのうちに「本」に触れて生きてきました。この本は、そうした私たちにとっての「本」のある生活とはいかなるものか、を改めて考えさせてくれるものです。

図書館司書を目指していた主人公は、災害に巻き込まれて亡くなり、異世界へ転生するところから物語は始まります。子供として生まれ変わった主人公は、病弱な体ながらも、前世からの「本好き」としての願いを達するべく奮闘します。この異世界では、一般に「本」に触れる機会がなく、「文字」という文化が広く浸透していません。このため、「学校」もなく「学ぶ機会」がありませんし、私たちのイメージする「(植物)紙」などありません。このため、主人公は、私たちが歴史で学んできた「パピルス紙」などこれまでの文明などの成果物を応用して、自ら紙や本を作ろうと奮闘します。

与えられた境遇に満足せず、異なる世界観の中でも自らの信念に基づいて行動する姿には、感銘を受けますし、そうして努力する主人公の姿と自らを重ねるとき、いかに自分が恵まれた環境の中で生活をしているか、そしてもっと努力ができるのではないかと、鼓舞させられました。

私たちは、「本」が当たり前前に存在する世界で生きています。これによって、私たちは文字を学び、教育を受けることができますし、他人との意思疎通を取ることができ、契約書などによって自らの権利を守ること、法律などのルールを作り皆に守らせることもできます。

シリーズもので分量も多いのですが、学生の皆さんにも親しんで読んでいただけたと思います。「本」という存在が私たちの人生をいかに豊かにするものであるか、この本を通じて感じてもらえると思います。

【文化政策学部 文化政策学科 講師 村中 洋介】

私が本書と出会ったのは、皆さんと同じ大学生の頃でした。恥ずかしながら、当時は大学院受験のために必死で漆芸の歴史を暗記しようとしたこの本に助けを求めていました。今でも、都度本書を読み返しては新たな発見があり、私の大切な1冊となっています。

表紙には、有名な「八橋蒔絵硯箱」の写真が用いられています。皆さんにとっては「渋いな…」という印象かもしれません。ですが、一度本書を開いたならば、各時代の漆芸品の意匠のモダンさに驚かれると思います。

本書は漆芸文化を知る上で、入門書として最適です。時代を網羅して幅広い作品が紹介されており、素材や工程に関することから、地場産業に関わることまで「鑑賞基礎知識」の枠を超えて解説がなされています。特に、作品ごとに「鑑賞のポイント」がまとめられていますので、その部分を読むだけでも当時の人々が意匠に込めた想いに触れることができます。また、珍しいほどの丁寧な図解が、複雑な漆工芸への理解を促してくれます。

紹介されている国宝の数々は、どれも日本人として知っておいて損はないでしょう。これから皆さんが各自の研究を深める上で、海外の文化藝術に出会うことも少なくないかと思います。そうした中で、同時代に日本人がどのような感性で文化を紡いでいたのかということを知っていることは、一つの物差しになってくれます。

本書の冒頭にもあるように、「うるし」という言葉の語源は、「うるわし」だったと云われています。縄文時代より、日本人は漆という特異な素材に魅せられ、決して簡便ではない工程を確立させながら、一つの文化を作り上げてきたのです。素材に敬意を払い、そのとき折々の状況を見極め、最適な判断をし、磨き上げる。漆のもつ独特の魅力はそうした人々の「手」と「想い」とが紡いできたのです。様々な新素材が溢れる現代でも、真に「うるわしい」ものだと感じます。

日本古来より人々を魅了してきた漆芸の世界を、皆さんの瑞々しい感性で受け止めてみてもらえればと思います。

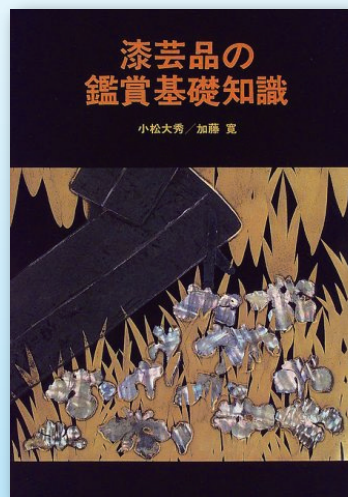
【デザイン学部 デザイン学科 講師 小田 伊織】

『漆芸品の鑑賞基礎知識』

小松大秀、加藤寛〔著〕

至文堂, 1997.12

[752/Ko 61]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

みなさんは普段、詩を読んだり書いたりしますか？殆どの人にとって、詩の世界は理解し難く、堅苦しいイメージを持つものかもしれません。私もこの作家に出会うまでは、そうでした。最果タヒさんは、近年若者を中心に注目を集めている詩人です。小説を含め、いくつか詩集を出されているのですが、今回は、私の一番お気に入り、2014年に出版された本書を紹介したいと思います。

タヒさんの詩の特徴は、平凡な言葉で、ふとした心の隙間を覗くような描写が多く、その他大勢ではなく、「私のことを書いた詩だ」と思えるところにあります。もやもやして言葉にできなかった感情を代弁してくれるような感覚です。落ち込んだときはもちろん、少し立ち止まって考えたいとき、誰かに背中を押されたいとき、様々な場面で私は彼女の本を読みます。そうすると、どんな感情も少しは肯定される気がするのです。

私はこの本に収録されている、「きみはかわいい」という詩が好きです。その一節を紹介します。「しにたくなること、夢を失うこと、希望を失うこと、みんな死ねって思うこと、好きな子がこっちを向いてくれないことが、彼女の不誠実さゆえだと思えないこと。当たり前なのかもしれない。きみはそれでもかわいい。」強い言葉も使われていますが、人間誰しも心の中にトゲトゲした部分や、自分勝手な気持ちを持っていると思います。そういった気持ちを持つことや、完璧にはなれないところも含めて、当たり前でかわいいというメッセージが心に強く残りました。

あとがきにはこう書かれています。「意味付けるための、名付けるための、言葉を捨てて、無意味で、明瞭ではなく、それでも、その人だけの、その人から生まれた言葉があれば。…そのまま、ありのまま、伝えられる感情がある。」上手な文章や、格好良い表現ではなくても、自分の言葉で等身大の「私」を表現できる場が詩なのだと気付かされました。学生時代だからこそ共感できることがたくさんあると思います。ぜひ一度読んでみてください。

【大学院 文化政策研究科 1年 岡本 唯】

『死んでしまう系のぼくらに』

最果タヒ [著]
リトルモア, 2014.9
[911.56/Sa 18]



『いちばん大切なのに 誰も教えてくれない 段取りの教科書』

水野学 [著]
ダイヤモンド社, 2018.10
[336.2/Mi 96]

いちばん大切なのに 誰も教えてくれない 段取りの教科書

good design company 代表 水野 学

あなたの仕事が 10倍早くなる!!!

くまモン、茅乃舎、相鉄、Oisixなど
多くのプロジェクトを手がけてきた
クリエイティブディレクターの仕事術



今回ご紹介するのは、クリエイティブディレクターの水野学さんが書かれた『いちばん大切なのに誰も教えてくれない段取りの教科書』です。この本と出会ったのは、複数の締切に追われて余裕がない期末をやっとの思いで乗り切った学部生の時でした。締め切りに追われる自分を顧みて、他の人はどう進めているのか知りたいと思っていたところにこのタイトルが目に入り、手に取りました。

著者の水野学さんは、「くまモン」「茅乃舎」「中川政七商店」など多くのプロジェクトを手掛けてきました。この本では、その仕事を進める中で実際にあったやり取りなどのエピソードを交えながら、最高の「段取り」のために何をしていけばよいか、時間を効率的に使うための工夫が書かれています。序章で、同時に何十件もの仕事が並行して進む中、ストレスなく仕事をスムーズに進めることができているのは、きちんと「段取り」をしているからだ、と、段取りがなぜ必要なのかを簡潔に伝えています。それに続いて、段取りとはルーティン化することであり、ベースをきちんとすることで仕事のアウトプットのレベルがあがる、そして仕事をやりとげるために段取りをするのだと述べています。

第3章では時間の効率化についての考え方を取り扱っています。スケジュールを制するために、著者が普段からどう考え行動しているのかが具体的に書かれています。その中で締め切りについても言及しており、「『質を高める』のか『時間を守るのか』を天秤にかけるのではなく、どちらも大事」、「『完成したら世に出す』のではない。『締め切りが完成』である」という2つの言葉は、最初に読み終えてから数年経った今でも思い出します。

この本には段取りをしていく、時間をうまく使っていくために、今から役立つ考え方が詰まっていると思います。漠然と時間がない、計画を立ててちゃんとしたいけど具体的にはどうしたらいいかわからない、そんな方におすすめしたい一冊です。

【大学院 デザイン研究科 1年 増子 葉月】

現在進行中のプロジェクトのご紹介

高坂文庫〔泉川本〕〔仮称〕整備

静岡県新大学（現・静岡文化芸術大学）整備推進顧問を務められ、初代学長に就任予定であった 高坂正堯先生は、1996年5月15日に逝去されました。本学の開学に多大なご尽力をいただいたご縁で、ご子息の 高坂昌信氏より、京都大学研究室に所蔵されていた資料が寄贈されました。国際政治、外交、軍事等を中心とした約4,100冊の資料は「高坂文庫」として整備され、多くの利用者が教育や学習・調査研究などに活用しています。

2018年、ご令弟である 高坂節三氏（公益財団法人 日本漢字能力検定協会 代表理事 会長兼理事長）より、故 高坂正堯先生のご自宅にある資料の寄贈をご提案いただきました。本件は、「高坂文庫〔泉川本〕〔仮称〕整備」として、本学20周年記念事業の一環で進められることとなり、2019年10月に、京都市下鴨にある故 高坂正堯先生のご自宅から、段ボール約300箱分の資料を本学に搬送しました。

また、資料調査の段階で、京都大学法学部教授 中西寛先生の研究室にも、故 高坂正堯先生の資料が保管されていることが判明しました。中西先生のご協力により、この資料は本件整備事業に併せて本学に寄贈されることとなり、2020年1月に搬送作業を行いました。

寄贈された資料には、貴重な図書・雑誌のほか、多数の文書や書簡、阪神タイガースのユニフォームを着た高坂先生の縫いぐるみなどの物品も含まれています。現在は、図書・雑誌類の受入を先行して進めています。本学の開学に尽力された故 高坂正堯先生の熱意にお応えするべく、今後も作業の進捗に努めます。



高坂正堯先生の肖像



応接間の書架

Moving texts -映画資料を読む-〔仮称〕

静岡文化芸術大学では、2013年3月、静活株式会社から、映画雑誌53タイトル約3,500冊、映画パンフレット約1,400冊、脚本277冊、図書約50冊、合計約5,000冊の映画関係資料の寄贈を受けました。このたび、これらの整理業務を終え、本学西ギャラリーにて展示公開を行う予定です。〔会期：2021年3月4日(木)～4月6日(火)〕（予定）

静活株式会社（以下、静活）は、1919年、静岡活動写真株式会社として創業し、1958年には静岡市中心部で14館の映画館を運営していましたが、2011年10月、静岡市内のすべての映画館をシネマ・コンプレックスへ移行しました。これを機会に、静活が所蔵していた多数の映画関係資料は、本学だけでなく、映画を専門とする全国の公的機関へ寄贈されました。当展示では、静活の映画館の変遷を当時の写真や映画館プログラムで紹介します。また、映画のために書かれたものの“動き(Moving)”に注目し、映画制作に関わった人たちが作品(Texts)をどのように表現したのか、上映作品のパンフレットや制作過程の記録が残る脚本を通して読み解きます。

資料の整理は、その種類の多さゆえに難渋しましたが、作業が進むにつれ、映画制作に関わった郷土の映画人について新たな発見がありました。今後は、本学図書館・情報センターで保管し、引き続き未整理箇所のアーカイブ化を続ける予定です。また、映像制作、映画研究等に関わる学生や研究者へ公開し、地域の文化資源の保存をすすめる、調査・研究の一助となるよう努めてまいります。



配架された資料



プロジェクトメンバーのミーティングルーム